

今回の研修は当放射線技術科では初めての海外研修であった為、参加申請に明確な目的が必要であった。「参加して当科にフィードバックできるものはあるのか？」と技師長に問われ、海外研修に参加できる機会はいまないと考えていた私は「見聞を広め、自分自身を見つめ直し、モチベーションを高くして仕事を続けるヒントを得ることが目的」と強く主張したところ、公務ではなかったが参加許可を頂く事ができた。

研修はスタンフォード大学の先生方、同大学出身の起業家並びに GEHC-J の現地スタッフ、それぞれの分野で活躍されている素晴らしい講師陣による、また同時通訳付きという贅沢な環境下で行われた。モズレー先生を始めとする講師陣のプレゼンテーションの内容は難解であったが、興味が尽きることはなく知への欲求が高まるばかりであった。また、その発信力の大切さを目の当たりに学ぶことができた。

同大学病院見学では、放射線科を見学することができた。米国の多くの技師は一つのモダリティ業務の専門性に特化したスペシャリストであるのに対し、日本の技師は複数のモダリティ業務に加え管理業務や読影補助、研究など多岐にわたり貢献しており、スペシャリストとジェネラリストの混在であると感じた。国によって文化や価値観が異なるため仕事に対する考え方に違いがあるかもしれないが、患者さんと共に病気に立ち向かう姿勢や的確な検査・治療の選択、安全な医療を提供することは同じである。国際的なガイドラインや論文は共通であり、現場ではそれらを根拠にした業務のルール作りが必要である。日本の技師も語学力を高め、発表や論文を通して世界に発信する力も必要であると感じた。

今回の参加では、参加前には予想し得なかった良いものをたくさん経験し得ることができたと思う。中でも、8期生の仲間と一緒に研修できたことは、私にとって最も大きな宝となった。8期生の方々の多くの思いや考えに触れると共に、自分の事も多く話すことができた。最近では、これほど熱心に自分や自分の職に対し話し合ったり考えたり機会は殆ど無かった。皆さんのモチベーションは非常に高く何より勤勉であることがわかった。私も今直面している仕事に真摯に取り組むことが自分を高め、質の高い医療を提供できることと改めて思うことができ、実践していきたいと考えている。最後に、本研修に多大なるご尽力を頂きましたスタンフォード大学の先生の方々、引率でお世話になりました北里大学の佐藤氏、研修参加を快諾して頂いた JA 愛知厚生連江南厚生病院放射線科吉川技師長ならびに技師諸氏、現地でお世話になりました松浦氏、GEHC-J の皆様、このような機会を与えて頂いた日本放射線技術学会の皆様に深謝致します。



モズレー先生(右)にプレゼントの説明をする筆者(左)